

んか。手紙やしな。女の手で書いたアるしな。見せて貰ふてもだんないか……。オ、いややの、源やん。」

「なんーや。」

「これ……あたいが……あんたに命掛けて書いて渡した起請やないか。」

「そうや。起請と云やア起請。ちらしと云へばちらし見たいな物や。」

「なんや。ちらしや……。知てるがな、知てるがな、なんや此間から、おかしい具合やと思ふてたんや。内のお母ちやんかて云ふてはつたし。此頃前のんが歸つてよつてに、氣を付けや、焼棒杭に火が付き易い。少しは格氣をしいやと云ふてはつた。そら妾いかて女やもの格氣のツ位は知てる。女に格氣の無いのと、刺身さしに大根だいこんの付いてないのと、辛子の利かんのはずばらかて頼りない位の事は知てるけど、これが素人やなし、出て居る者が格氣して、それが爲に愛想をつかされたらいかんと思ふて、黙つて辛抱して居たら、そら殺生や〜。知つてるがな、あんた今日は別れ話にお來なアつたんやわ。さうならさうと打明けて云ふとくなアつたら宜いやないか。お前と斯う云ふ中になつたけども、實は今度斯う云ふ譯で義理で女房を持たんらんさかいに、お前の縁はこれまでの縁と諦らめて呉れ。その替りに兄妹にでもならうと云ふて呉れてやつたら、あたいかて諦らめがつくのにな命掛けて書いた起請を破つて、内のお母ちやんに聞いて貰ふ。(立上る)」

「小照ツ……。まてツ……。(三味線が入る。唄へ男心は……)コラ、泣く涙が有るなら小便に垂れとけ。今命掛けて書いたと吐かしたな。命掛けて書く起請なら一枚しか書きはせまいな。」

「起請を何枚も書く阿呆が有るかいな。」

「啞つけ。俺の友達の喜イ公に書いて渡そがな。」

「チョツと源さん。貴方も男らしい人やなア。別れるのんならそんな難癖付けんと綺麗に別れたら

「どうやね。誰が他に起請を書いて渡すもんか。」

「何吐かすぞい。下駄屋の喜六に書いて渡そがな。」

「下駄屋の喜六て、どんな奴や。」

「どんな奴……。此前住吉へ行つた時一緒に丸太格子で一杯飲んだやらうがな。」

「ハア彼奴か。口唇の厚い。背の低い、ぶく〜肥えた、漬豆の土左衛門みたいな奴。源やん堪忍しとう。汚なやの。なんば妾が物好きでも、そら餘り殺生やし。エ、……。なにか……。あいつ、起請を貰ふた云ふてよるのか。ようまあそんな事が云へたもんやしなア。顔と相談をしよつたら、そんな事云はれへんのに。」

「イヤ。お前書いた事がないか。」

「ハア〜。」